

聖書：マタイ 1：18～21

説教題：その名をイエスと

日時：2014年12月21日

イエス様の誕生の様子については、マタイとルカの福音書が記しており、ルカは妻マリヤの立場から書いています。ある日突然マリヤに現われて、「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」と語りかけた天使は、「あなたはみごもって、男の子を産みます。」と彼女に告げます。ヨセフとの結婚に備え、大切な期間を過ごしていた彼女にとって、それは何とショックな言葉だったでしょう。しかし彼女は心配も悩みもすべて主に委ね、「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことば通り、この身になりますように。」と自らを差し出した次第を、私たちはルカの福音書に見ます。

一方のヨセフについてはこのマタイの福音書から知りますが、ある意味ではマリヤ以上に大変な中を通らせられたことが分かります。ユダヤでは婚約したカップルは夫婦と見なされました。19節ではヨセフが「夫ヨセフ」と呼ばれていますし、20節には「あなたの妻マリヤを迎えなさい」との御使いの言葉があります。しかしこれは、結婚生活が始まっていたということではありません。ユダヤでは通常、このような婚約期間を約1年間過ごした後、一つ屋根の下に住む結婚生活に入りました。その日を待ち望んでいた時のこと。18節にありますように、二人がまだ一緒にならないうちに、マリヤが聖霊によって身重になったことが分かったのです！マリヤはすでに御使いのお告げを受けていましたが、ヨセフは何も知らなかったのでしょう。数ヶ月後に迫る一緒の生活に向けて、期待と喜びに満ちた婚約期間を過ごしてきたとばかり思っていたのに、愛する婚約者のみごもりは今や否定できない事実としてヨセフの前につきつけられたのです。

ヨセフは正しい人でしたので、このような彼女を妻としてめとることはできないと判断しました。しかし彼は彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に彼女を去らせようとはしました。その時、主の使いがヨセフに現れてこう言ったのです。20節：「ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたを妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。」

ここにイエス様の誕生の不思議さが示されています。イエス様は通常の仕方によらず、聖霊によってマリヤの胎に宿られました。なぜこのようなことが必要だった

のでしょうか。一言で言うなら、それは罪人の救い主となるお方は罪に全く汚染されていない人でなければならなかったからです。犬の子は犬、猫の子は猫。同じように罪人から普通に生まれて来る子はみな罪人です。しかしそれでは救い主にはなれません。そこでイエス様は聖霊によって身ごもることが必要とされたのです。ある人は、それでも罪人のマリヤを通して生まれたのだから、罪の汚染があったと言うべきではないか！また、どうせならマリヤなど通さず、新しい罪のない人間を造って送ってくだされば良かったのではないかと言うかもしれません。しかし聖書によれば、私たちの救い主になるお方は私たちの中の一人でなければなりません。私たちとつながりのない存在は私たちの救い主になることはできません。ですからイエス様は私たちの中の一人の女性を通して誕生する必要があった。しかし聖霊が私たちの理解を超える奇しい仕方で守ってくださったので、この方は罪から守られたきよい人として誕生することができたのです。

さて、この聖霊による神のクリスマスプレゼントなるお方について、御使いはその名前を指定します。その名を「イエス」とつけなさい、と。イエスという名は一般的な名前でもヘブル語のヨシュアに相当し、「主は救い」とか「主は救う」を意味します。御使いはなぜこの名前をつけるべきか、その理由も述べています。新改訳では訳されていませんが、21節の「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。」の後には、「というのは～だからです。」という言葉が原文には入っています。すなわちこの節後半の「この方こそ、ご自分の民をその罪から救って下さる方です」という部分は、なぜ「イエス」という名を付けるべきなのか、その「理由」を説明する部分であるということです。ですから私たちはここに述べられている真理を理解し、十分に思い巡らすことによって、「イエス」という名の意味を深く味わい、一層の感謝と賛美をもってこの名をお呼びすることへ導かれるのです。

まず最初に「この方こそ」という言葉が出て来ます。これは原文でも文頭で特に強調されています。すなわちこの方こそ救い主である。この方のみ、そうである。他に救い主はいないということです。そしてこの方の救いは「罪からの救い」と言われています。私たちは「救い」という言葉を色々な意味で使います。病気からの救い、苦しみからの救い、貧しさからの救い、人間関係の悩みからの救い、……。確かにそれら一つ一つも私たちにとって切実な問題ですが、それらすべての苦しみや悩みの根っこには「罪」という共通の大きな問題があると聖書は語っています。ですからこの罪の問題の解決なしには、表面に現れて来る様々な問題の真の解決は

ないということになります。

どのようにして罪が私たちの内に入り、私たちの生活に災いをもたらすようになったかについては創世記 3 章に記されています。それまでは非常に良い世界だけがありました。しかし最初の人間の罪によって、この世界に罪が侵入し、私たちと私たちの生活の上に深刻な影響を及ぼすようになりました。生まれてくる子はみな罪を受け継ぎ、罪に支配されて生きる者となりました。この罪は神との交わりを妨げ、その結果、神の真の祝福は私たちの上に来ないことになりました。むしろ呪いが臨むようになりました。また私たちはお互いとの関わりにおいて、罪の力によって人間関係を破壊し合うようになりました。また私たちの罪の性質はこの世界や自然をも利己的に使おうとする方向に働き、そのため、世界は混乱し、ますます住みにくい所へ変化しています。このようなあらゆる災いの元凶である罪からどうやって、マリヤの胎に宿った赤ん坊は私たちを救うのでしょうか。私たちの罪からの救い主となるためにはクリヤーしなければならない二つの基準があります。

一つは、その方が全く罪を犯さない完全にきよい生涯を送ることです。自分が罪を持っていたら、他人は救えません。ですからイエス様は無罪の状態で生まれてくる必要がありました。そしてこれからこの世のあらゆる境遇、誘惑、試練の中で、神の前に一つも落ち度なく、完全に律法を満たす正しい歩みをして行かなければなりません。そしてもう一つの基準は、その完全に正しい生涯をささげた最後に、きよいご自身を罪人の身代わりの犠牲としてささげることです。苦しみを全く受ける必要のきよい方が代わりにさばかれることによって、罪の下に閉じ込められていた人々を反対に救い出すことができるのです。

ある人はここで、なぜイエス様お一人で多くの人を救い出せるのかと思うかもしれませんが、一人の身代わりは一人分しか有効でないのではないかと。イエス様が普通の人間ならそうです。しかしイエス様が多くの人を救い出せるのは、この方がまことの人間であると同時にまことの神であられるからです。21 節にこの方が神であることが暗示されています。神の民を「ご自分の民」と呼べるのは神しかいません。また今日は見ませんが、この後 23 節の「インマヌエル」という呼び名にも、イエス様が神であられることが示されています。このようにマリヤの胎にこの時、人として宿られたお方は神なる方であられたので、その方が支払われる犠牲は無数の人々を救い出す価値を持つのです。もちろんイエス様は神だからと言って、私たちを救うことは簡単であるかのように考えてはなりません。福音書にはイエス様がこ

のためにどんなに大きな戦いをされたかが示されています。十字架前夜、ゲッセマネの園では、汗を血のしずくのように滴り落としながら祈りの格闘をされ、「できませんならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたの御心のように、なさってください。」と祈られました。そして十字架上では「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と叫ばれました。人となられた神がここまでの叫び声をあげながら、身の毛もよだつ戦いを全身全霊をかけて戦って行かれた。その測り知れない愛の力と犠牲をもって、イエス様はついに私たちに覆っていた罪とその力を粉碎してくださる。そして虜となっていた私たちに解放してくださる。これはまさに「この方こそ」、「この方のみ」になし得ることなのです。

このイエス様が与えて下さる祝福を、最後に 21 節から三つ心に留めたいと思います。その第一は、この方こそ私たちを「救う」と言われていることです。単に救いの可能性を提供するとか、そのための手助けをするという程度のことではありません。イエス様があることを成し遂げて、後は私たちが自分で自分の救いを確実にするのではないのです。救うのは私でなく、イエス様です。もちろんその救いにおいて、私たちが果たすべき役割はあります。しかし救うのは神です。この方が私を救ってくださるのです。

二つ目に、この方は罪「から」救うとあります。罪の中にとどまりつつ救う、のではありません。しばしばイエス様は罪人の救い主だと言って、罪の生活にとどまることを肯定する人がいます。しかしイエス様は罪から救い出すお方。罪の支配から抜け出させてくださる方。もちろん罪と全く無関係になるのは天に召される時です。それまでは日々罪との戦いの中にあります。だからと言って、私たちは罪の中に安住した状態であってはならない。イエス様は罪「から」救う方。その外へ救い出してく下さるお方です。

そして三つ目に、ここには単に「罪から」救うとあるのではなく、「その罪から」救うとあります。「その」とはその前の「ご自分の民」を受けている言葉ですから、「彼らの罪から」と訳しても良いものです。ここから分かることは、ここで考えられている罪は観念的・抽象的な罪ではなく、一人一人の個人的な罪、パーソナルな罪であるということです。一般的・抽象的な意味で罪について論じ、これを責めつつも、現実の生活では個人的な罪を自分に許し、あるいはそれを放置し、あるいはそれを抱きしめ、恋い慕い、楽しみふけてさえいるということがあり得ます。し

かしイエス様はまさにその私たちの罪から救って下さるのです。日々の生活における罪、言葉における罪、行ないにおける罪、思いにおける罪から私たちを抜け出させてくださるお方なのです。

イエス様がこのような救い主であることは私たちにとって大きなチャレンジでしょう。私たちは罪にとどまる生活を自分に許容してはなりません。そこから救って下さるイエス様に真により頼まなくてはなりません。と同時にこれは私たちに深い慰めを与えてくれる真理です。私たちはイエス様を信じて歩む中でも、自分の弱さに悩む者です。あまりの不甲斐なさに心が折れてしまいそうな時もあるでしょう。しかしこの方こそ、私たちを救ってくださるお方なのです。このお方を見上げ、その力強い御名に信頼するからこそ、私たちは慰められ、希望を与えられ、勇気を与えられて、私たちもまた戦うという歩みに立ち上がることができるのです。御使いは言いました。「その名をイエスとつけなさい。なぜならこの方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださるお方だからです。」